

論文

造形教育における版画制作

-スチレン版による一版多色刷りについて-

児玉 太一¹⁾

キーワード：幼児造形，初等教育，美術教育，図画工作，スチレン版画

要旨：本論で取り上げるスチレン版画の活動は，幼児教育から初等教育に至るまで，広く行われる版による造形活動である。版画自体は，初等教育から中等教育の図画工作・美術の中で，全ての学生が制作経験のある活動であるが，本年，本学幼児教育学科の学生を対象とした授業内アンケートの結果，スチレン版画の制作経験が9.3%に留まることが明らかとなった。そこで本論においては，初等教育の木版画で取り組む一版多色刷りの手法をスチレン版画で実践し，一連の制作過程を示した。保育の指導書や初等教育の教科書に記載されない，スチレン版画のイメージ制作・転写・彫り・刷りの活動の制作過程を中心に記述し，学生作品とワークシートによる結果から考察した結果，特に刷りに関して優れた題材であることが明らかとなった。

I. 研究の経緯

本論は，本学学生にとっても馴染みが深く，幼児教育から中等教育の美術において必須の題材である版画制作の制作過程と支援を目的に執筆した。美術系大学の体系において，絵画の一分野として，版画が位置づけられてきた様に¹⁾，一般に版画は絵画から派生し，絵画表現のひとつとして認知されてきたといえる。しかし，版画の制作過程は版を介することによる彫りや刷りなどの段階的な制作過程があり，絵画とは活動の流れが大きく異なる表現技法である。一例を挙げれば，初等教育で取り込まれる木版画は，彫刻刀による版木への彫りを通じて，イメージの凹凸を制作し，バレンで紙への転写が成される。紙やキャンバスなどの支持体に対峙し，即時に行為の結果を参照できる絵画と比すると，版を介することや，多種の用具を扱う点で，大きく異なる表現技法であると考えられる。

筆者は2016, 17年に教育学部初等教育講座において，絵画表現を中心としたシラバスを設計し，課題のひとつとして，小学校中学年時に取り込まれる一版多色による木版画の表現活動を取り上げた。図画工作で児童への制作を指導する上で，教員養成課程の学生にとっても木版画に関する一定の技能と知識の獲得は不可欠であるが，初等教育で実施される版画制作の制作過程については，細かな点において参照できる媒体が不足している現状があった。また，幼児教育における教材研究については，保育の造形教育をサポートするための様々な雑誌や，WEB上で制作過程を閲覧できる個人や団体のHPが確認できる。し

¹⁾ 山陽学園短期大学幼児教育学科

かしながら、いずれも活動の細部については割愛されている例も多く、媒体によっては、制作過程や使用する教材も異なっている。

現在の美術・造形教育における版画制作は、テープの芯やローラーを用い、絵の具を転写する造形遊びや、凹凸を見つけて紙に転写するフロタージュ[1]、スタンプや型紙を用いたステンシル、紙版画[2]などが幼児期から学童期にかけて取り組まれている。また、小学校中学年からは単色の木版画[3]、高学年においては、一版多色木版画や彫り進み法[4]、単色の木版画と裏彩色[5]が取り上げられている。中学校においては、複数版を用いる多色木版画やエッチングプレス機を用いたドライポイントなどの凹版画、リトグラフなどの平版、シルクスクリーンを代表とする孔版の題材までもが取り上げられている[6]。筆者が中学校の美術教育に携わった経験に照らし合わせると、全ての版画技法を網羅することは難しいが、版の活動が持つ体系的な制作過程が、美術・造形教育において、必須の要素であると認知されてきたものと考えられる。全国の美術館においても、紙作りと版との関わりなど、多種の要素を生かしたワークショップも開催されており[7]、版画の活動自体は美術・造形教育において普及し、社会においても広く認知され、定着している活動であると言える。

本年1・2年生を対象としたワークシートによる調査の結果、回答が得られた75名全ての学生が初等教育から中等教育にかけて、何らかの版画制作を体験している事が明らかとなった。しかし、多くの学生の記憶に残っているのは、単色の木版画で制作経験が100%であったのに対し、その他の版画の活動は紙版画が8%、消しゴム版画5.3%となり、版画に対する理解と知識の不足が見られた。スチレン版を使用したスチレン版画の制作は、既に学校教育において広く普及し、実践されているものと筆者は理解しているが、制作経験者は9.3%に留まる結果となった。スチレン版画は、幼児教育から初等教育において広く取り組まれる版画の活動で、彫刻刀を用いる木版画に比すると、安全指導の観点からも優れており、幼児・児童の版による造形遊びを様々な展開できる重要な題材といえる。そこで本論においては、授業時に学生に解説した下絵制作や転写・彫り・刷りといった段階的に行われるスチレン版画による一版多色刷りによる一連の制作過程を、学生作品を元に論述した。

先ず第Ⅱ章においては、版画の種類や日本における版画の歴史、幼児教育の中で取り組まれている内容について先行研究を元に論述し、版画を美術・造形教育のなかで学ぶことの意義について考えてみたい。

第Ⅲ章においては、スチレン版による多色刷りの制作過程について、2018年度前期に2年生を対象に実施した本学での実践内容から、下絵制作・彫り・刷りなどの各制作過程について詳述する。

第Ⅳ章・第Ⅴ章においては、学生の完成作品²⁾による結果から考察を行い、スチレン版による多色版画に関する作品制作の可能性を制作行程や道具のなかから考えたい。特に刷りについては、木版画と比して、どのような制作上、表現上の特性を見ることができののか考察を行った。一版多色版画はモノタイプ³⁾に近い刷りであり、絵の具の濃度や刷り方の可能性を検証し、表現の広がりを期待したい。

II. 版画制作の意義

1. 版画の手法と歴史

一口に版画と言っても多種多様な版画があり、現代ではコンピューターグラフィックスの発展もあって、デジタルプリントや3Dプリンターなども版画の範疇に含める先駆的な考え方もある。このような現代的な表現は別として、伝統的な版画制作では、金属板や木板、布地など、様々な素材に対して、インクをつく部分とつかない部分(孔版においては通過する部分と通過しない部分)をつくり、版を介して紙にイメージを刷り取る手法の総称を版画と呼んでいる。これら伝統的な版画の技法においても、刷りの方法と形式によって凸版・凹版・平版・孔版の4版種(図1)に分類され、凸版に木版画、凹版に銅版画、平版にリトグラフ、孔版にシルクスクリーンというように、形式毎に代表的な技法がある。それぞれ使用する版の材料も異なり、刷りや製版の工程も大きく異なる。

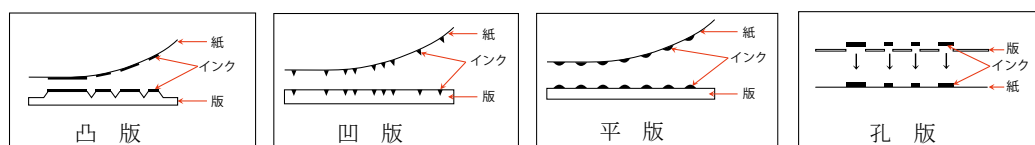


図1 版種による刷りの図解

スチレン版画と同様に、凸部にのせたインクを紙に刷り取る木版画が、凸版にあたる代表的な版画技法であり、精緻な線で表現される銅版画の印象が色濃い西欧においても、木版画は用いられてきた。我が国の版画が北斎や歌麿呂、広重などの活躍によって花開いた色彩も豊かな錦絵や浮世絵と呼ばれる木版画であり、未だ世界において高い評価を得ている我が国を代表する文化と言えるだろう。日本の木版画は江戸時代に興隆を極めた錦絵が母体にあるが、日本において版画が表現としても、用語としても歴史上に現れるのは画家であり、幼児教育者でもあった山本鼎の役割が大きい。創作版画運動、児童画運動を推進した山本鼎は今日、自明のこととして受け入れられている画家の手による「自画・自刻・自摺り」を推奨し、『非実用的なる美術的』という概念をもった版による絵の表現[8]、刀画とも呼ばれた版画の制作を行った。今日の学校教育を通じて、多くの人々に馴染んだ彫刻刀の彫り跡を生かした表現は山本鼎らの創作版画運動から派生したものと言える。このように、日本の絵師や西洋の画家と職人の分業制から移行して、近代は画家自身の手による版画制作が主体となった。専用のプレス機や腐食の過程が必要であった銅版画や石版画よりも、簡易で身近な道具での制作が可能で、独自の工夫の余地があった凸版にあたる木版画やリノカット⁴⁾が、画家の制作の手段として馴染みやすかったものと推察される。

2. 先行研究

版画は制作過程のどの時点に着目するかによって、制作者自身の取り組み方や工夫に生かされる表現技法であるといえる。鳥居昭美・鳥居淑子は幼児期の版画教育について記した「子どもの版画遊び」の中で、版画の楽しみを「写す喜び」にあるとして、スタンプングやモノタイプ、フロッタージュなど、幼児期の版画の楽しみかたや、用具の配置、版の遊びの支援方法について具体的に記述している[9]。湘北短期大学の小野修平は安田女子大学短期大学部において、クレーの油彩転写の発想を基にしたモノタイプを附属幼稚園で実

施している[10]。この手法では赤・青・黄・緑のインクを幼児自身がローラーで樹脂板に乗せた後に、用紙を被せて鉛筆の筆圧を加えることで、刷り用紙に筆跡によるイメージが転写される。紙を手で押さえる事により転写される形や、4色の色彩の重なり合いにより生じる重厚感やずれによる、思いがけないイメージの変化が興味深く、鳥居らが述べる「写す喜び」を表した手法であるといえる。また、長野県立大学の宮城正作は、幼児教育学科の学生を対象に、ステンシルによるトートバッグ制作の指導実践を紹介している[11]。ステンシルは、デザインナイフ等で複雑な図案を切り抜くことや、「橋」と呼ばれるイメージ間の繋ぎ目の理解の難しさから、前後期の中等教育で取り組まれる課題である。宮城は、簡易な制作方法として、クラフトパンチを用いた製版を紹介し、幼児教育においても活用できる内容へと昇華している。スチレン版画の高度な美術表現にまで発展した作品としては、三枝考司の実践が挙げられる[12]。三枝はスチレン版をスプレー式クリヤーラッカーやラッカーシンナーで溶解することで微妙な凹凸を作り上げ、モチーフの石の陰影や、細かなディテールを見事に表現している。パレンではなく、木版画プレス機による刷りを行い、木版をはじめとする他の凸版の手法では得難い、スチレン版の素材性を生かした美しい色面のイメージを実現しているといえる。また株式会社クラフテリオは、ムンクのジグソー版⁵⁾の事例を想起させる、スチレン版による切り抜き版画を教材として販売、紹介している[13]。ハサミやカッターナイフで容易に形を切り抜くことが可能な、スチレン版を色毎に切り分け、パズルのように組み合わせることで、理解の難しい見当合わせの必要なく、多色版画を容易に活動に取り入れ、楽しむことができる。

版画はそもそもが、印刷術として始まり、その技術を通じて国の文化を表し、歴史や変遷を知ることにつながる表現活動である。特に、凸版の手法は木版画をはじめとして、我が国を代表する芸術文化である。同時に洋の東西を問わず制作され、創作版画の世界において数多く手がけられた歴史を持つ。誰にとっても身近な判子やスタンプの構造は凸版であり、子供にとっても理解のしやすい版画手法であると言えるだろう。この凸版の手法の中でも、スチレン版画は廃材を用いた活動としても展開可能で[14]、材質の特性から、安全かつ安価に制作が可能な版画技法である。このことから、技術のみに偏重することなく、版画制作を学びやすい有効な指導材料であると考えられる。

Ⅲ. 研究目的・方法

1. 研究目的

ここからはスチレン版画の、特に多色刷りの技法による制作過程を中心とした論述を試みた。今日、材料や技法の細かな点に関しては、技法書や保育の指導書にも求めることができるが、技法書は木版画に関する高度な技術をもとにした用具・技法の紹介に限られており、全体の内容が専門的でスチレン版画に関する制作工程の記載は見られない。また、保育の指導書にある記載は、全体の制作過程への言及が十分ではないため、特に制作過程についての理解が不足するものと考えられる。初等教育での取り組みで考えると無論、スチレン版画の指導に関する大きな枠組みは、教科書のなかにも示されているが、保育の指導書と同様の懸念がある。よって、ここでは主にスチレン版の一版多色刷りにおける実践的な表現方法と道具の解説・制作工程を検証し、学生作品とワークシートに結論を求めた。

版画制作自体は多くの学生が制作経験のある表現活動であるが、前述の通りスチレン版

画の技法について経験のある学生は事前の予想よりも少なかった。また、スチレン版画の制作についての実践報告が少ない状況も鑑みて、以降より全体の制作過程について詳述していきたいと考え、本研究の目的を次のように設定した。

- (1) 小学校図画工作で取り組まれる、陰刻法による一版多色版画を木版からスチレン版に変えて展開し、その実践方法について詳述する。
- (2) スチレン版画の幼児への支援方法について、学生作品とワークシートから検証する。

2. 一版多色版画について

本研究で取り組んだ一版多色の手法は、小学校図画工作の中学年以降に取り組まれる一版多色刷りの木版画の手法をスチレン版に置き換えて展開したものである。一版多色刷りの技法を、木版画を例に説明すると、一版単色の木版画が陽刻であるのに対し、一版多色の木版画は陰刻法⁶⁾に類する手法である。厳密にいうと、一版多色の手法は彫り進み法などを含めて複数あるが、黒や赤などの色画用紙や和紙に刷りを行い、彫った部分から紙の地色が見え、輪郭線としてあらわれる陰刻法が初等教育において取り組みやすい題材といえるだろう。

この手法は、明度の低い紙の上に、明るい色を刷り重ねることで得られる重厚感のある画面が特徴であり、紙を自ら染めて制作する場合もある。版画の制作過程は、版種や版画技法の別を問わず常に分断的で、1 下絵の制作 2 転写 3 彫り 4 刷りと段階的に進められる。一版多色の木版画は基本的に線を彫る手法であるため、単色の木版画に比べると彫る箇所が少なく、刷りまでの時間が短い。以降より、2018年度前期に課題とした「自画像」をテーマとした学生作品を例に具体的な工程について記述していきたい。

3. 実践方法

- (1) 実践時期： 2018年6月から7月
- (2) 実践場所： 本学C209教室
- (3) 実践対象： 前期「図画」受講者59名(A・B・C・Dクラス)を対象とした
- (4) 使用画材と用具・材料：スチレン版2mm厚(270×210mm)、黒画用紙、ポスターカラー、バレン、鉛筆、フォークなど

4. ワークシートについて

ワークシートは一版多色によるスチレン版画の制作過程や、使用する用具の内容を把握できるように明示した。工程は複雑で、段階的に行われるため初回に全体の流れを示し、適宜Power Pointで各回の活動の補足を行った。

5. 実践内容

- (1) 自画像をテーマとした下絵の制作



図2 学生の下絵



図3 学生の下絵

下絵の制作はイメージの整理やイメージ反転を防止する役割がある。イメージの整理とは版画にするに際し、制作しやすいイメージとするための行程であり、同時に絵画におけるアイデアスケッチやエスキースと同じく、発想を促すための工程である。多くの学生は自画像を描く際、証明写真のように自身の表情を真正面から捉える。しかし、自画像とは自身の内面や考えを表す表現でもある。自身の表情だけではなく、好きなものやファッション、顔の角度など構図を工夫し、異なるイメージを複数枚描き出すようにする（図2）。また、好きな物事、行為を画面に加えることで内面を表すこともできる（図3）。ここで示した図においては、いずれも画面が縦位置の構図であるが、横位置で描くことによって、背景の空間の広がりを作ることにもできる。版画の下絵制作においては、デッサンに見られるような細かな陰影は排して輪郭線を中心に描き、アイデアを考えることが重要である。

(2) 転写

版画は孔版を除き、版上にあるイメージが紙に写しとられて鏡像となる。正像とするためには、印鑑とおなじく、版の制作の段階で鏡像にし、紙に刷る際に元のイメージへと戻るようにする。イメージの反転を防ぐ目的でトレーシングペーパーなど半透明の紙に下絵を写し、裏返した鏡像のトレーシングペーパーと版の間にカーボン紙を挟み、版木に転写する。尚、スチレン版の場合には、版材自体が柔らかくであり、筆圧のみで十分にイメージ

を写す事もできる。カーボン紙は必要に応じて使用する。

(3) 彫り

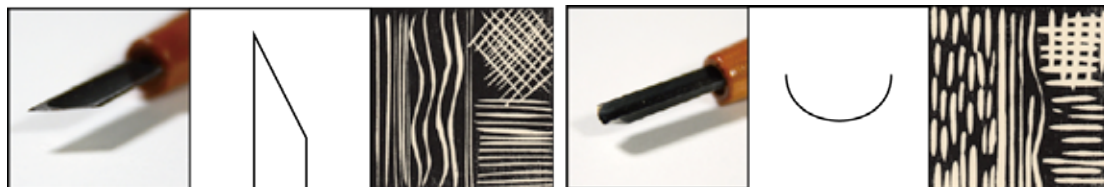


図4 切り出し刀

図5 丸刀



図6 三角刀

図7 平刀

木版画においては通常、彫刻刀を使用し、切り出し刀(図4)・丸刀(図5)・三角刀(図6)・平刀(図7)の4種類がセットで販売されているものが多いようである。図に見られるように、彫刻刀毎に異なる彫り跡自体が表現の一部であり、単色の木版画においては、重要な要素であると言える。スチレン版においては、彫刻刀は使用せず、鉛筆やボールペン、フォーク・スプーン・くし等の、身近な用具を用いて凹凸を作る(図8)。また、油性ペン等に含まれる溶剤で版を溶解し、凹凸を作る手法も紹介されているが、ペンの内容量の状態によって十分な凹凸が出来ない。ラッカーシンナーなどの溶剤を用いる事で、凹部を作ること出来るが、安全指導の観点からも学生に対しては、紹介にとどめていずれも使用を控えた。

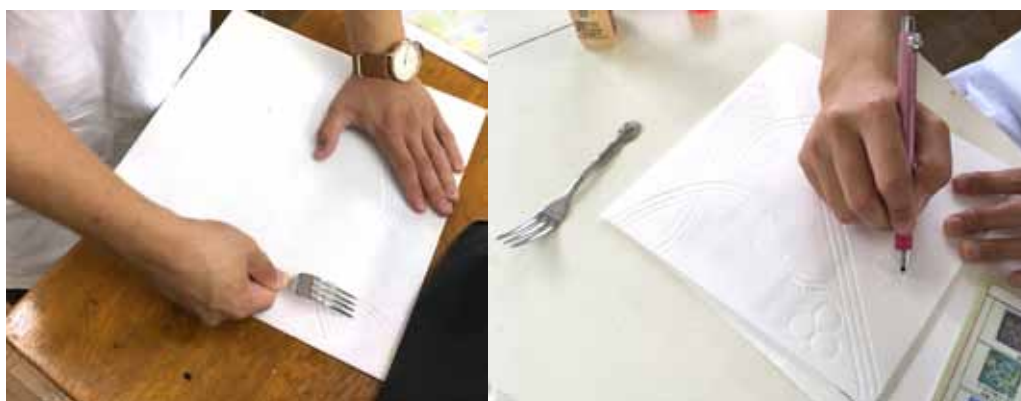


図8 ボールペンやフォークによる版の制作

(4) 刷り

一版多色版画においては刷りの工程が最も時間を要し、工夫のしやすい工程であると言える。刷りの方法は、望む結果に応じて変更することができるが、およその工程は以下の

①から⑥にまとめることができる。

- ① 刷り用紙はテープで版に固定しイメージのズレを防止する。一辺すべて留めてしまうと紙を版から剥がす際、破れる恐れがあるため3点を縦方向に留めると良い（図9）。

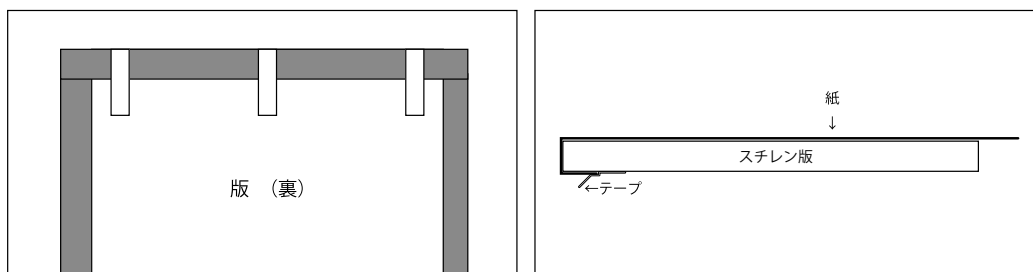


図9 テープで版に紙を固定する

- ② 絵の具の分量は刷りの面積に合わせてつくる。スチレン版の場合は、水を入れすぎると版の上ではじく恐れがあるため、比較的水は少なめにする。特に、重要なのは白の混合である。黄色などの明度の高い色彩を濃く刷るためには、白を混色することで地色を隠蔽した明瞭な刷りが期待できる。



図10 当て紙を用いた刷り



図11 完成まで紙は版にテープで固定する

- ③ 水分を含んだ紙は摩擦に弱く、稀に紙が破れることがある。また、紙を直接擦ることによって紙が動き、ずれが生じる可能性があるため、刷り紙の上にはコピー紙・更半紙などをおいてバレンで圧を加える（図10）。
- ④ 一色刷り終わったら版に固定したままの状態でも紙を開き、筆で次の色をのせる（図11）。
- ⑤ ①から④の工程を繰り返し、全ての色面を刷りあげる。
- ⑥ 1枚目の刷りの後に別の色を用いて刷りをする場合、版は水で洗い絵の具を落とす。

IV. 結果

単色の版画に対して一版多色版画は、用具によって作られる凹部で区切られた凸面に、筆で絵の具を塗り、用紙に刷り取る技法である。絵の具のつき具合や、絵の具の濃度によってあらわれる表現が変わるため、同じように複数枚を刷り取ることが難しい。だが、制作する側にとって、予想できないイメージを刷り取ることができる点が、一版多色版画の魅力でもあり、それが絵画表現の延長にある手法であると言えるだろう。そこで、表現活

動の刷りの過程においては1枚のみで終えるのではなく、2枚程度の刷りを行い、各自の目標とする表現に応じた刷りを行うことを求めた。



図12 学生作品



図13 学生作品



図14 学生作品



図15 学生作品

上図の12から15の作品は、それぞれ同一の版による異なる刷りの作品例として示した。図12と図14の作品は1回目の刷りで、当初の計画通り、すべての色面を均一な刷りとなるよう完成させた。図13と図15の作品は、2枚目の刷りであり、頬の部分でわずかに異なる色彩を混ぜ合わせるにより、肌に対してわずかに異なる色彩を刷っている。異なる色の絵の具をおき、1枚目との表現のバリエーションをつくと共に、版の上で、区切られていない部分を、色の差異をつくることで頬を表現している。



図 16 学生作品



図 17 学生作品

図 16 と図 17 の作品は、いずれも背景に工夫の見られる作品である。図 17 の作品では、色面を版で作し、あえて平坦に刷ることを意図して、漫画やアニメの一コマを想起させる表現を行っている。図 17 の作品は、図 16 の作品とは異なり、版の上で色彩を混ぜ合わせ、ぼかすことによって、油彩のスフマートにも似た空気感を感じさせる画面をつくらせている。また、画面の左右で絵の具の水分量が異なるため、左部分の背景がかすれてはいるものの均一に刷れているのに対し、右側の背景はデカルコマニーを思わせる、独特の質感が表現されている。いずれも、版の刷りによって生まれる効果であり、偶然に現れる絵の具の質感が興味深い。

V. 考察

前述の通り、スチレン版画はほとんどの学生が今授業内で初めて経験した手法である。各学生が難しいと感じた点は前年までに筆者が取り組んだ、木版画ともほぼ共通しており、「刷りの際に、線が消えてしまう」という点が最も多く挙げられた。これは多くの学生が、版に乗せる絵具の分量が多いために生ずる問題である。版に乗せる絵具はマヨネーズ程度の硬さで、版の上で薄く伸ばすことが肝要である。また、水分の量を適切に調整すると共に、凹部に溜まった絵の具は乾いた筆や綿棒で適宜、除去するという対策が挙げられる。しかし、一度の刷りで上手く刷る事は稀であり、複数枚を刷りあげ、適切な絵の具の分量を実際的に経験することが必要であるだろう。

表現上における意見として、「塗り方がまだらにならないようにする」という意見が見られた。しかし、学生作品を見てもわかる様に、一版多色刷りの手法に関しては、必ずしも均一に刷る必要はない。学生の表現意図によって異なるが、絵画の延長線にある手法として、偶然に表れる色のムラや写すことであらわれる偶然性を楽しむという柔軟な考えも必要である。

また、活動中に学生から直接、質問のあった内容として、「髪の毛等の黒い部分は刷らなくてもよいか」という声が多数聞かれた。基本的に、紙の色と絵具の黒はその質が異なり、黒い紙の上に黒の絵具で刷ったものでもイメージに反映される。髪の毛の流れはフォーク等で表現し、各自で工夫して刷ると髪の毛の質感を立体的に表現もできる。

幼児への指導に際して、配慮すべき意見としては、「(版に) 孔を空けないよう注意する」

や「強く凹凸をつけられないときの援助」が挙げられた。一度の描画で、版に孔が空くことは考えづらいが、力が不足している子供に対しては適宜援助を行い、適切な角度、持ち方を工夫して伝えると良いだろう。安全指導上の意見としては、「えんぴつやフォークを人に向けない様に教える」という意見が多数見られた。無論、木版画に比すると安全に活動できる内容であるが、先の尖った用具を使用する為、「使用の際は周りの状況を確認する」という意見も見られ、学生の多くが版の活動における安全指導を欠かせないものと認識していることが分かった。

筆者が前年に取り組んだ一版多色の木版画では、刷りの過程において版に絵の具を乗せた際、版木に吸収され、乾燥も早まることからイメージの擦れが生じ、刷りの工程が難しいという意見が多数見られた。特に背景にイメージのない作品については、色面も大きく授業中も上手く刷る事ができないという声があった。全ての面に絵の具をのせる前に乾燥が始まってしまうのである。しかし、スチレン版画を用いた一版多色刷りにおいては、その素材の特性から、そもそも絵の具が吸収されにくく、乾燥も遅れることにより、概ね円滑な美しい刷りを得ることができた。木版画での一版多色刷りは手早く、効率よく活動することが求められ、大半の学生が失敗も多く苦心していたが、本学のスチレン版の活動の際には、このような失敗は見られなかった。また木版画では、紙が画面に張り付き、破れるという事例も多数見られたが、スチレン版では見ることはできなかつたのは、大きな成果であったと言える。

VI. 今後の研究課題

スチレン版画の活動は、木版画に比べて刷りの過程が容易に行えることが、本研究を通じて明らかとなった。これまで木版画で実践し、課題としてあった一版多色刷りの刷りの工程における乾燥や紙の破損の問題も、スチレン版を用いることで、解消の可能性を見ることができた。無論、木版画においては彫刻刀を用いる彫りが重要な学びの要素であり、活動自体に優劣があるものではないが、刷りを重視して効率よく、絵画に準じた版の活動として取り組む際には、スチレン版による一版多色刷りは有効な題材であると言える。

また1学年の版画の活動において実践済みであるが近年、ノントキシク・プリントメイキング⁷⁾の材料が一般的となり、環境や人体の健康に配慮した水溶性の油性インクも販売されている⁸⁾。水溶性油性インクはインクの重厚感を見た目の特徴として、乾燥しづらく、紙のたわみが生じないという、油性インクの特性を保持しつつ、水と中性洗剤での用具の清掃が可能なインクである。灯油による清掃で、指導者にとっても負担の大きかった油性インクと比すると、扱いやすい材料と言えるだろう。特に、学生の実践から明らかとなった線のつぶれも、水溶性油性インクで解消することができ、微妙な凹凸による陰影の表現も可能であると考えられる。ただし水溶性油性インクはゴムローラーを用いるため、本論で取り上げた一版多色刷りには不向きであると言える。今後、一色刷りのスチレン版画や紙版画の制作活動で応用し、使用の可能性について今後も実践的に研究の予定としている。

また、本論で示した制作過程は、写真や文章、授業内での指示などをもって理解する事が困難な箇所も多数見られる。今後学生らが、制作過程を俯瞰して眺め、一層の理解を深める為にも、ビデオをはじめとしたICTを活用した記録の必要性を感じている。制作したビデオ教材は主に、学生のアクティブラーニングの支援を目的として学内 moodle におい

て公開し、今後その教育効果についても考察を行っていきたい。

付記

本研究は、山陽学園大学・短期大学学内研究補助金（平成 30 年度）による研究活動の一環として行った。この場を借りて謝辞を申し上げたい。

文末注

- 1) 例えば東京藝術大学では日本画、油画、版画、壁画、油画技法・材料で絵画科を構成し、武蔵野美術大学は油絵学科、女子美術大学は洋画専攻の中に版画を置き、いずれも絵画の一分野として版画を位置付けていることが分かる。
- 2) 論文中の表現作品については全て、論文掲載の使用許可を得ている。
- 3) モノタイプは一般に、塩ビ板や金属板、ガラス板などの吸収性の無い版の上に、油絵の具や水彩絵の具などの描画材でイメージを描き、乾燥に至る前に、紙に写す版画技法である。版を介することによる、かすれや滲みなどの偶然性を特徴とする。木版をモノタイプの版として用いる場合などは、一般的なモノタイプの手法と区別するため、木版モノタイプと呼称することがある。モノタイプの同義語にモノプリントがある。
- 4) リノカットは床材などに用いられる、リノニウム材を版として用いた版画の凸版にあたる手法のこと。
- 5) エドワード・ムンクのジグソー版は、複雑で職人的な位置合わせの必要な多色刷りを、版自体をジグソーで色毎に切り分け、パズルのピースのようにはめ込んでから刷りを行い、独自の表現とした。
- 6) 陰刻はイメージの部分を彫り、白い紙に黒の絵の具で刷るとイメージの部分が白く抜けて写る。陽刻はイメージの周りを彫ってイメージを浮き立たせ、黒の絵の具で刷ったときにイメージの部分に黒が写る。
- 7) ノントキシック・プリントメイキング（Non Toxic Printmaking）とは、環境と人体への不可の少ない、資材を用いた手法を指す。版画制作においては、銅版画の硝酸やシルクスクリーンの有機溶剤など、化学薬品の使用が欠かせなかったが、一方で、その毒性については制作者の間で長年の懸案事項となっていた。ノントキシックの手法では、これらの薬品を可能な限り排し、安全性の高いものを使用することで、制作者と環境への負担軽減を目的に特に、欧米において実践されている。
- 8) フランスのシャルボネール社のアクアウォッシュが水溶性油性インクにあたる。

引用文献

- [1] 日本文教出版株式会社、「たのしいなおもしろいな ずがこうさく 1・2 上」, 平成 30 年, pp22-23
- [2] 日本文教出版株式会社、「たのしいなおもしろいな ずがこうさく 1・2 下」, 平成 30 年, pp46-47
- [3] 日本文教出版株式会社、「見つけたよ ためしたよ 図画工作 3・4 下」, 平成 30 年, pp46-47
- [4] 日本文教出版株式会社、「見つめて 広げて 図画工作 5・6 上」, 平成 30 年, pp44-45
- [5] 日本文教出版株式会社、「見つめて 広げて 図画工作 5・6 下」, 平成 30 年, pp42-43
- [6] 京都市立芸術大学美術教育研究、「美術資料」, 平成 22 年, pp26-35
- [7] 馬場知子、「紙から作る！銅版画」, 横浜美術館
<https://yokohama.art.museum/event/workshop/data-460.html>,
2018 年 12 月 10 日確認

- [8] 青木繁, 「世界版画史」, 美術出版社, 2001年, p44
- [9] 鳥居昭美・鳥居淑子, 「子どもの版画遊び」, あゆみ出版, 1995年, p10
- [10] 小野修平, 『幼児の造形活動における版画制作のための教材研究とその実践』, 「版画学会 no. 47」, 版画学会, 2018年, pp38-46
- [11] 宮城正作, 『保育者養成における版画教育の位置づけと実例』, 前掲書, pp32-37
- [12] 三枝孝司, 『スチプリント技法について-スチレンボードによる凸版技法-』, 「大学版画学会 no. 26」, 大学版画学会, 平成8年 pp21-23
- [13] 株式会社クラフテリオ, 「切り抜き版画に挑戦しよう!」
<https://www.crafteriaux.co.jp/product/1718/>, 2018年12月10日確認
- [14] 槇英子, 「保育をひらく造形表現」, 萌文書林, 2018年, p43